

成句「梅檀は二葉より一」述語部分の変遷

—カウバシからカンバシへ—

池 上 尚

1はじめに

優れた人間は幼少の頃からその才能を表すことを、白檀が発芽の頃から香氣を放つことに喩えて、「梅檀は二葉より芳し」(以下「成句」と言う。)と/or。この成句は、『觀仏三昧海經』に見られる「梅檀ハ根芽漸漸成長シ、纔ニ樹ヲ成サント欲シテ、香氣昌盛」に基づく⁽¹⁾もので、初出例は『保元物語』の「梅檀と云々樹は二葉より芳かんなるは」(金刀比羅本)まで遡ることができる。現在、この成句の述語部分にはカンバシを使用することが一般的である⁽²⁾が、初出例である『保元物語』ではカウバシとなっていることに注目したい。

一般に、成句は古い時代のことばを残す傾向にあると考えられている⁽³⁾。しかし、この成句の述語部分に関しては、ともにカゲハシを原形とするカウバシ・カンバシ⁽⁴⁾のうち、より新しい形である後者に取って代わられているのである。述語部分の交替は、いつ頃起きたのであろうか。

本稿では、この成句の述語部分の変遷について調査し、カウバシ・カンバシの交替現象がいつ頃生じたのかを明らかにする(2節)。また、この成句を好んで使用し始めた資料群である軍記物語については、複数の諸本を対照し、この成句にどういったバリエーションが見られるかを確認する(3節)。これには、一言語表現を通史的に考察するだけでなく、共時的にはどのような展開を見せてきたのかをも考察する意図がある。そして、池上(2010a・b)で明らかにした「日常語におけるカウバシ・カンバシの変化」と、「(成句の属する)文章語におけるカウバシ・カンバシの変化」とが、どのような相関関係にあるのかを探ってみたい(4節)。

調査対象は、主に上代から近現代までの文学作品とし、近世以降のことわざ資料や明治期の国語辞書なども加えた。なお、本稿では、語彙レベルの言及においては古代・近代の別なく片仮名表記歴史的仮名遣い(カウバシ・カンバシなど)で、表記レベルの言及においては原文通りの表記を鉤括弧で括り(「芳」「かんばし」など)示す。

2述語部分の史的変遷⁽⁵⁾

2.1 中世

前述した通り、この成句の初出は中世前期の『保元物語』(1220頃か)であり、その述語部分は「芳」(金刀比羅本)であった。続く『平家物語』(13C前期)も「かうばし」(龍谷大学観一本)と

表1 中世

No.	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
1	保元物語	1220頃?		○芳					
2	平家物語	13C前期		○					
3	撰集抄	1250頃				○薫			
4	源平盛衰記	14C前期		○芳					
5	曾我物語	南北朝		○					
6	太平記	14C後期		○					
7	一箱満王（幸若舞）	中世後期		○					
8	撰待（謡曲）	中世後期					○		
9	蝉丸（謡曲）	中世後期		○香					
10	桜井（謡曲）	中世後期		○芳					
11	天草本平家物語	1592		○					
12	天草本金句集	1593		○					
13	信長公記	1598			○				
計			0	10	1	1	1	0	0

ある。表1から明らかなように、軍記物語の中で好んで使用され始めた成句らしい⁽⁶⁾が、説話『撰集抄』（1250頃）においても確認された。

（1）梅檀は二葉より薫し。（撰集抄・卷九・九：松平本）

中世前期の成句ではカンバシがほとんど使用されず、一貫してカウバシが使用される傾向にあることを踏まえれば、例1もカウバシと読む可能性が高いと考えられる。なお、成句の述語部分において「薫」の字を使用したものは通史的に見て例1のみである。

中世後期においても、カウバシが圧倒的に多い。また、成句は軍記物語以外にも幸若舞・謡曲などにおいて見られるようになり、例2のように意図的に述語部分の表現を工夫するものも出てくる。

（2）父給べなうとて走り寄れば。岩木を結ばぬ義経なれば泣く／＼膝に懐き取る。げにや梅檀は。
二葉よりこそ匂ふなれ。（謡曲・撰待：謡曲二百五十番集）

中世後期には、述語部分の表現を変えても本来の形が想起されるほどに、広く知られた成句として認識されていたのであろう。この成句が『天草本金句集』（1593）に採られていることも、その証左と言える。

（3）虎生マレテ三日牛ヲ食ウ機有リ。Xendan ua futaba yori cōbaxij ga gotoqu zo.（天草本金句集・二〇一則・心：東洋文庫蔵本）

そして、中世後期末に至りようやくカンバシの例が出現する。以下の例4が、この成句の述語部分にカンバシが用いられた最初の例である。

（4）梅檀者二葉よりしてかんばしく（信長公記・卷十二：陽明文庫蔵本）

ただし、留意しなければならないのは、上掲の例4があくまでも「表記上のカンバシの初出例」で

あることである。そもそも、カウバシはカゲハシの第2音節 [ŋu] が鼻母音化した語、カンバシはカゲハシの第2音節 [ŋu] が撥音化した語であり（注(4)参照）、その第2音節の音価は近似していた。少なくとも、中世後期末に才段長音の混同が生じるまでは、カウバシ・カンバシの2語に明確な別語意識が存していたとは考えにくい。表記上ではカウバシが先に登場していても、その時点でカンバシという発音が存在しないことの証明にはならないのである。2語間に別語意識が確立する中世後期末以前においては、たとえカンバシと発音されていても、（カウバシ・カンバシ2語がほぼ同じ音価の語であると書き手が認識し、）カンバシを「かうばし」と表記した可能性も十分に考えられよう。

しかしながら、「表記上の」という限定があったとしても、中世後期末以前にはこの成句の述語部分にカンバシが確認されることは重要な事実である。「この成句の述語部分には、他でもないカンバシが適切である」という意識が未だ芽生えていないことを示すと考えられるからである。中世後期頃までは、積極的に「かんばし」と表記する段階ではなかった、と指摘できよう。

2.2 近世

表2によると、近世初期の段階においても変わらずに、成句の述語部分においてカウバシが優勢であることが分かる。しかし、18世紀以降はカンバシも散見され始める。

(5) エ、いかに幼ければとて十ヲに余れば大人役などさ程にも弁へなき。せんだんはふたばより
かんばしといふ譬えも有。（吉野都女楠・天皇かちゞの御ゆき：大阪市立大学文学部蔵本）

さらに、読み不明の用例が3例あることに留意したい。近代に至ると述語部分にカンバシを使用するものが急増する（後述）ことを考慮すれば、近世の読み不明の用例をカンバシと読む可能性も低くはないのである。

また、前代に引き続き、ニホフや述語部分の表現を変えたものもあった。なお、ニホフは、例6を最後に近代以降には見られなくなる。

(6) げにやせんだんはふたばよりこそにほふなれ。（凱陣八嶋：赤木文庫蔵本）

(7) 梅檀ハ二葉より。その香。餘木に優るといへり。（俊寛僧都嶋物語・巻一：広島市立中央図書館蔵本）

例7のように述語部分に工夫を凝らすもの他に、以下のように述語部分を省略したものが多くあり、これが近世の特徴にもなっている。述語部分を省略しても当該の成句だと知れるほど、この成句が一般に広く定着していたことを示していると言える。

(8) 梅檀ハ二葉よりと申も、この御かたの事なるへきなど、ほめあぐるうちに、（杉楊枝：東大霞亭文庫蔵本）

(9) 梅檀はふた葉とやら、やがて成人したならば、孝行者にならうのに、（仮名文章娘節用：文政十四年序刊本）

表2 近世

No.	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
14	醒醉笑	1623		○					
15	毛吹草	1645		○					
16	子孫鑑	1667		○					
17	杉楊枝	1680						○	
18	医生物語	1681						○	
19	凱陣八嶋	1685?					○		
20	遊小僧	1694		○					
21	絵本集艸	近世中期			○				
22	吉野都女楠	1710頃			○				
23	国姓爺明朝太平記*	1717		○芳					
24	国姓爺明朝太平記*	1717		○					
25	軽口機嫌囊	1728						○	
26	尾張俗諺	1749				○香			
27	根無草後編	1769		○香					
28	喜美賀樂寿	1777						○	
29	傾情知恵鑑	1783			○				
30	譬喻尽	1786		○香					
31	戯男伊勢物語	1799		○香					
32	石言遺響	1805		○香					
33	石童丸苅萱物語	1806		○香					
34	椿説弓張月	1807-11		○芳					
35	俊寛僧都嶋物語	1808							○
36	国字分類諺語	1830				○芳			
37	仮名文章娘節用	1830						○	
38	諺叢	1832				○香			
39	翟巢漫筆	1866						○	
40	世俗俚言集	幕末頃		○					
41	仙台藩士谷津老鱗雜記	1868			○				
計			0	13	4	3	1	6	1

*1 資料に2例確認

2.3 近代（明治）

表3から、明治期に至ると、近世以前の様相とは一転してカンバシが優勢になることが分かる。読み不明の用例も9例と多くあり、このうちカウバシと読むものもいくつか含まれるかもしれないが、明治期はカンバシが優勢になり始める時期であることは確かである。

興味深い例として、日本の諺をローマ字で300収録する『Kotowaza-dukusi』（1910）がある。

(10) Sendan wa Hutaba yori kanbasi.Sendan wa kôbasii ki no Na. (Kotowaza-dukusi)

表3 近代（明治）

No.	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
42	和漢洋諺	1885				○香			
43	日本いろはたとへ英訳	1886						○	
44	無花果艸紙	1887頃				○香			
45	浮雲	1887-89		○馨					
46	ことわざ	1889		○馨					
47	和漢泰西俚諺集	1890			○香				
48	知玉叢誌	1890-91				○芳			
49	国民の品位	1891				○馨			
50	知識宝庫金諺一萬集	1891							○
51	俚諺千篇堪忍袋卷之上	1891			○馨				
52	閨桜	1892							○
53	作文良材世言考	1892				○香			
54	格言俚諺一言萬金	1893				○香			
55	雛錫	1897						○	
56	ことばの泉	1898-99	○						
57	俚諺通解	1899			○香				
58	処世要訣規箴	1899		○香					
59	出處註釈世諺叢談	1900		○香					
60	俗諺辞林	1901			○馨				
61	新選俚諺集	1901			○香				
62	思出の記	1901			○芳				
63	二葉より馨ばしの梅檀	1901				○馨			
64	国書辞典	1902	○						
65	一語千金俚諺類集	1903							○
66	年ほめ*	1903			○香				
67	年ほめ*	1903			○香				
68	新式いろは引き節用辞典	1905		○馨					
69	福岡県俚諺集	1905頃				○香			
70	俚諺辞典	1906			○香				
71	分類一覧俚諺全書	1907			○香				
72	日本俚諺大全	1908			○香				
73	俚諺通解	1909		○香					
74	品性修養金言俚諺釈義	1910		○香					
75	小学校掲示資料	1910				○香			
76	Kotowaza-dukusi	1910			○				
77	大辞典	1912			○				
計			2	7	13	9	0	2	3

*1 資料に2例確認

成句は「kanbasi」であるのに対し、解説では「kôbasi」となっている例である。2語共存の中で、日常語として（古語的ではあっても）未だ「梅檀（という植物）がカウバシ」と表現され得る状況にありながらも、文章語としての成句の述語部分にはカンバシが適切であると認識されていたことを、如実に示しているのではなかろうか。

述語部分を省略したものは2例、述語部分の表現を工夫しているものは3例ある。

(11) 梅檀は二葉より知れる（一語千金俚諺類集）

さらに、『明治期国語辞書大系』（大空社）所収の国語辞書27冊を調査したところ、成句を立項するものとして落合直文著『ことばの泉』『国書辞典』、山田美妙編『大辞典』の3冊が確認された。

落合直文の手による2冊は、いずれも述語部分にカグハシを採用する。

(12) せんだん - は - ふたば - より - かぐはし ……『せんだんの木は、もえいづるときよりかぐはしくにはふといふ義』すべて、人に優りたる人は、未だ幼き時より、そのしるしあり。（ことばの泉）

なお、『ことばの泉』ではカグハシ・カウバシ・カンバシ3語を立項しており、このうちカグハシのみを古語として認識する。古くからあるこの成句の述語部分には、原形であるカグハシがより適切

表4 近代（大正・昭和）

No.	資料	成立年代	カグハシ	カウバシ	カンバシ	読み不明	ニホフ	述部省略	その他
78	実用故事俚諺俗語新辞典	1912			○香				
79	日臺俚諺詳解	1913				○香			
80	罵倒録	1914						○	
81	万国共通ことわざ集	1916			○芳				
82	格言俚諺辞典	1917			○芳				
83	和漢泰西金言と俚諺	1918			○香				
84	月明	1921				○香			
85	大婚滿二十五年	1925				○香			
86	社会万般番附大集	1927			○香				
87	格言警句集	1928			○芳				
88	金言	1929			○香				
89	福島県の俚諺	1932				○芳			
90	Japanese proverbs and proverbial phrases	1935				○芳			
91	諺の解釈	1935			○香				
92	俚諺読本	1936				○香			
93	伊予の俚諺	1936			○				
94	趣味常識俚諺と世相	1940			○香				
95	Japanese proverbs	1940			○				
96	ことわざ物語	1940			○香				
計			0	0	12	6	0	1	0

であると考えたのであろうか。あるいは、著者が歌人であったことが、雅語であるカグハシの採用に繋がったのかもしれない。いずれにせよ、成句の述語部分にカグハシを採用したものは、通史的に見てもこの2例のみであった⁽⁷⁾。

上の2辞書とは対照的に、山田美妙の編んだ『大辞典』は述語部分にカンバシを採用する。

- (13) せんだんは - ふたばより かんばし ……香木タル栴檀ハソノ嫩葉カラ早ク既ニ芳香ヲ有スルトノ意。スペテ、秀才ナドハソノ幼少カラ早クソノオモムキガ見エテ居ルトノ意。(栴檀ノ嫩葉必シモ事実ニ於テハ香バシクナイ。此句ハ只栴檀ヲ香木ト思フママ想像デ单ニ云ヒ成シタモノ)。(大辞典)

落合直文による先の2辞書はやや例外であって、国語辞書においても例13のような見出しが立てられるほどに、成句の述語部分としてのカンバシの使用は定着していたと考えられる。

2.4 近現代（大正・昭和）

成句の述語部分においてカンバシが優勢になり始めた明治期を経て、大正期に至ると、表4に示すように、読みの分かっているものではカンバシしか見られなくなる。2語が完全に交替したと見てよからう。昭和期においてもその様相に変化は見られない。現在のように、述語部分にカンバシのみを使用するように固定化したのは、近代の明治期から大正期にかけてであったと考えられる。

- (14) Sendan wa, Futaba yori kanbashi. 梅檀は二葉より香し (Japanese proverbs)

3 諸本によって異同があるものについて

軍記物語『保元物語』『平家物語』『源平盛衰記』『曾我物語』『太平記』『信長公記』と説話『撰集抄』の7つは、2節で使用した写本・版本以外にもいくつかの諸本を調査した。以下、異同の見られたものを中心に言及していきたい。

3.1 『保元物語』

現存する『保元物語』の諸本のうち、最も古い奥書（文保二年（1318））を有する文保本は中巻しか残されていないため、成句の有無が確認できなかった。ただし、文保本の書き入れを本文に取り入れている半井本にはこの成句が見られることから、文保本も半井本と同様に、成句の見られない可能性が高いと考えられる。

この2本に次いで古態とされる鎌倉本・京図本にも、成句は見られない。前掲した金刀比羅本以前の『保元物語』の諸本において、この成句は取り入れられていないようである。

金刀比羅本系の諸本であり、金刀比羅本よりも先に成立したとされている宝徳本には成句が見られるものの、「香ハしかなる物を」とあり、その読みは分からぬ。

注目すべきは、金刀比羅本系に次ぐ京師本系において、カンバシが使用されていることである。

- (15) せんたんといふ木ハ二葉より かんばしかんなる物を (保元物語：京師本)

ただ、京師本以降の諸本を校異し、流布本系統の本文を前提とする『参考保元物語』には「馨シカ^{カウバシ}ンナル物ヲ」とある。京師本以外の諸本にカンバシを使用するものは確認できないことから、『保元物語』の成句の述語部分としてはカウバシが定着していたと考えられよう。

なお、流布本系の古活字本、流布本系に近い本文を持つとされる杉原本には、成句自体が見られなかった。

3.2 『平家物語』

『平家物語』では、語り系諸本か増補系諸本かを問わず、成句の述語部分には一貫してカウバシが使用される。

語り系諸本のうち、鎌倉時代成立と推定される古本系諸本では、屋代本を除く諸本に成句が見られる。述語部分は、カウバシを使用するものが国立国会図書館蔵百二十句本・龍谷大学蔵覚一本・東京大学国語研究室蔵覚一本の3本、「香」とあり読みの分からぬものが平松家本・竹柏園本・慶應大学斯道文庫蔵百二十句本・鎌倉本の4本である。

(16) 梅檀ハ自二タ葉^{カウバシ}香ト（平家物語：竹柏園本）

同じく語り系諸本で江戸時代成立とされるものを見てみると、平家正節では「芳」、波多野流節譜本では「香」とあり、いずれもカウバシを使用する。

鎌倉時代成立とされる増補系諸本では、語り系諸本と全く異なる調査結果となった。源平闘諍録・四部合戦状本・南都本・延慶本・長門本には成句が一切見られない。増補系諸本のうち、唯一成句が見られたのは『源平盛衰記』である（2節では、ひとつの資料として『平家物語』とは別に立てる）。

(17) 梅檀樹ハ二葉ヨリ芳ク^{カウバシ}（源平盛衰記：内閣文庫蔵十一行古活字本）

蓬左文庫蔵写本でも「芳」となっており、『源平盛衰記』においても成句の述語部分としてカウバシが定着していた可能性を思わせる。

3.3 『曾我物語』

『曾我物語』では、真名本系の妙本寺本・大石寺本、仮名本系の太山寺本には成句が見られなかつたが、流布本系の十行古活字本・彰考館本・万宝寺本には見られた。

(18) 梅檀は、二葉よりかほばし⁽⁸⁾（曾我物語：十行古活字本）

(19) 旃檀は二葉より苟^{カウバシ}（曾我物語：彰考館本）

(20) せんたんは二ばよりかうはし（曾我物語：万宝寺本）

流布本の中でも、古態を留めるとされる彰考館本の述語部分は「苟」とあり、その読みは分からず、『大漢和辞典』にも見えない字である。他の2本はカウバシを使用していることから、『曾我物語』においても成句の述語部分としてカウバシの定着していた可能性は高いと考えられる。

3.4 『太平記』

『太平記』は、諸本によって述語部分に異同がある上に、他の軍記物語にはない表現が見られる。

(21) せんだんハ二ばより芽て百匁香ハシトイヘリ（太平記：神田本）

(22) 梅檀ハ二葉ヨリ百匁ニ馥シト云リ（太平記：義輝本）

「梅檀の芳香が百匁に及ぶ」という表現は、『太平記』のこの2本にのみ見られた。なお、例22の義輝本「馥」の字は、成句中のカウバシに使用する例が他に見られなかった⁽⁹⁾。

慶長八年十二行古活字本・玄玖本はそれぞれ「芳」「香」とあり、読みは分からぬ。読みの分かるものとしては、土井本・梵舜本・日置本がある。土井本・梵舜本はそれぞれ「かうはし」「芳」とあり、ともにカウバシを使用するが、次に挙げる日置本（元和四年（1618）書写）ではカンバシを使用する。

(23) 梅檀ハ二葉ヨリ香シ^{カンバシ}（太平記：日置本）

3.5 『信長公記』

成句の述語部分におけるカンバシの初出は『信長公記』であった。陽明文庫蔵本（例4）・我自刊我叢書ではともにカンバシを使用するが、作者である太田牛一の自筆本と推定される岡山大学池田文庫蔵本には成句が見られなかった。町田家本・内閣文庫蔵本は、この2本を校合したものしか確認することができなかつたが、これもやはりカンバシを使用する。他の軍記物語は（いくつかの諸本を除き）成句の述語部分としてカウバシが定着していたのに対し、これらよりも成立年代の遅い『信長公記』はカンバシで定着していたようである。

3.6 『撰集抄』

『撰集抄』は諸本によって述語部分の異同が大きい。広本系の松平本（例1）・書陵部本・静嘉堂本では「薰し」とあり読みは分からぬ。書陵部本・静嘉堂本は近世初期頃に書写されたものであるので、カンバシと読む可能性もあるかもしれないが、正和四年（1315）の奥書を有する松平本は、未だカンバシが多用されていない時期の本文を示していると考えられ、カウバシと読んでいた可能性が高いであろう⁽¹⁰⁾。松平本・書陵部本・静賀堂本と同じく広本系である鈴鹿本では、述語部分が変えられており、動詞ニホフが使用される。

(24) 梅檀は二葉よりにほひ。（撰集抄：鈴鹿本）

慶長年間刊行とされる略本系の嵯峨本ではカンバシが使用される。

(25) 梅檀は二葉よりかんはし。（撰集抄：嵯峨本）

3.7 諸本の異同から推測されること

「梅檀は二葉より一」は、軍記物語において特に好まれた成句であったようである。しかし、資料ごとに表現の細かな異同があるのみならず、同じ資料においても諸本によって様々な展開を見せるこ

とも明らかになった。これはつまり、多少表現を工夫してもそれと特定できるほどに、当時この成句が広く知られていたことを示しているのではなかろうか。

また、例 15 の京師本『保元物語』、例 23 の日置本『太平記』、『信長公記』の諸本、例 25 の嵯峨本『撰集抄』など、成句の述語部分にカンバシを使用する諸本は、いずれも中世後期末から近世にかけて成立したものである。諸本を対照させることによっても、この成句の述語部分にカンバシが進出してきた時期は浮かび上がってくると言える。

4 おわりに

中世後期末から近世期にかけて、本来カウバシが使用されていたこの成句の述語部分に、より新しいカンバシが進出し始めた。そして、近代の明治期から大正期にかけて完全に 2 語は交替することになる。2 語の交替という変化だけでなく、述語部分に 2 語以外を使用したり、述語部分を省略したりするなど、表現に様々な工夫を凝らす場合のあることも確認された。こうした多彩な展開を見せながらも、この成句の述語部分はカンバシただひとつに限定されていくのである。

しかし、なぜ、カウバシではなくカンバシがこの成句の述語部分を独占するようになったのであろうか。なぜ、古くから伝えられてきた表現をあえて変化させるに至ったのであろうか。

池上（2010a・b）で明らかにしたように、古代において広く《快いにおいがする》ことを表していたカウバシは、近世期頃、《飲食物の焦げるにおいがする》ことのみを表すように意味の限定化がはじめる。時代が下るにつれて、日本語において「“焦げるにおい”表現への欲求」が高まり（池上 2012），その欲求に応えたのがカウバシであった。そうしてカウバシの表しにくくなった意味（単に《快いにおいがする》という）領域にカグハシ・カンバシが入り込んでいき、前者は雅語として、後者は否定表現を伴う評価語としても使用されるという、意味・用法の分担が成立し、現代に至る。

カウバシの意味の限定化が進行していくと、まず、日常語における「植物がカウバシ」という表現はやや古めかしく感じられるようになる。言わずもがな、「梅檀（という植物）がカウバシ」と表現することの不自然さへも次第に繋がっていく。また、この成句自体が、嗅覚表現ではなく人物の評価表現としての使用に固定化されるに従い、述語部分においても、評価語としての意味を確立しつつあるカンバシが相応しいと考えられるようになった可能性もある。通常、日常語における言語変化は、文章語に属する成句にまで容易に影響を及ぼさないと考えられているが、「梅檀は二葉より一」には当てはまなかったのである。このことはまた、成句を変化させるほど、カウバシは《飲食物の焦げるにおいがする》ことを表す語専用になろうとする傾向が、カンバシは評価語になろうとする傾向が、それぞれ強かったことを示すものと考えられる。

さらに、この成句が特に軍記物語において好まれたという事実から、「軍記物語に相応しい成句」というイメージを手伝う語としては、撥音を含む音声的特徴を持つカンバシが適切であると考えられるようになった可能性も十分にあろう。

このように、カグハシ・カウバシ・カンバシ 3 語の意味・用法分担、語としてのニュアンスのちが

いが明確になるにつれ、「梅檀は二葉より一」の述語部分に相応しい語として、カンバシが意識されるに至ったのである。

- (1) 中村幸彦校注（1961）『風来山人集』岩波書店 423 頁参照。『觀仏三昧海經』とは、5世紀前半、東晋の佛陀跋陀羅によって漢訳された觀仏經典である。源信の『往生要集』（984-985）の中でこの『觀仏三昧海經』が頻繁に引用されており、この經典が日本の淨土思想にも大きな影響を与えたことが指摘されている（福原隆善（2001）「『往生要集』における『觀仏三昧海經』の受容」『香川孝雄博士古稀記念論集仏教学淨土学研究』永田文昌堂）。なお、『往生要集』には、『觀仏三昧海經』の「梅檀ハ根芽漸漸成長シ……」に類似する表現として、「梅檀の樹出成する時に、能く冊由旬の伊蘭の林を變して、普く皆香美なり。」（往生要集・69 ウ：『最明寺本往生要集譯文篇』汲古書院 1992）のような文言が見られた。
- (2) 管見の限りでは、『日本国語大辞典（第2版）』、『角川古語大辞典』、『故事俗信ことわざ大辞典』の3辞書のみ、この成句の述語部分にカウバシ・カンバシの2語を採用する。それ以外の辞書ではカンバシのみを採用するようである。
- (3) 「憎まれっ子世にはばかる」など。（小林賢次（1988）「憎まれ子世にはばかる—ハバカル・ハビコル・ハダカルの交渉—」『日本語研究』10 参照。）
- (4) カグハシの第2音節 [ju] が、[u] と鼻母音化したのがカウバシ（亀井孝（1956）「ガ行のかな」）『国語と国文学』33-9（亀井孝（1984）『日本語のすがたとこころ 1』吉川弘文館 所収））、撥音化したのがカンバシである（濱田敦（1952）「撥音と濁音との相関性の問題—古代語における濁子音の音価—」『国語国文』21-3（濱田敦（1984）『日本語の史的研究』臨川書店 所収）。
- (5) 以下、時代毎の表で、用例の得られた資料・述語部分の詳細を示す。読み不明とは、「香（バ）シ」や「芳（バ）シ」などのように、漢字表記のため読みの分からぬものを指す。カウバシ・カンバシ・読み不明の用例については用字も示したが、用字の明確な使い分け意識は見出せなかったことをここに付言しておく。なお、成句以外に使用されるカウバシ・カンバシ2語についても、用字の使い分け意識は見られなかった（池上 2010a・b）。
- (6) この成句に限らず、軍記物語全般においては「何か一つの重要な歴史的・社会的・政治的事件を述べようとする時、規範を求めて故事來歴を探り、権威ある言説を典拠に尋ねるのであり、ことわざ・格言・故事成語が自ら多量になる」（麻原 1986）という傾向がある。
- (7) 『国書辞典』の方は、雅語辞書のためか成立の新しいカンバシは立項されていない。また、文学作品においては成句の述語部分にカグハシを使用したものは見られなかつたが、明治期のことわざ資料『格言俚諺一言萬金』にはカグハシと読む可能性のある「香ハシ」が見られる（「○梅檀ハ二葉ヨリ香ハシ○千里ノ馬ハアレド一人ノ伯楽ハナシ○船頭、多ケレハ舟山へ上ル」（格言俚諺一言萬金））。ただし、前後には濁点の脱落している箇所（「多ケレハ」など）も散見されるため、「香ハシ」も濁点が脱落している可能性があり、カウバシ・カンバシと読む可能性がないとは言いきれない。
- (8) 「かほばし」という表記は、[au] > [ao] > [ɔ:] という開長音化の表記面への現れと考えられる（出雲朝子（1983）「『仰ぐ』『倒る』などの語形について」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 参照）。
- (9) カウバシという語自体を通史的に見た場合には、『今昔物語集』などで「馥」の字が使用されることもあった。
- (10) 尚学図書編（1982）『故事俗信ことわざ大辞典』（小学館）には、以下のような記述がある。
 梅檀は二葉（ふたば）より薰（くん）じ梅花（ばいか）は薔（つば）めるに香（こう）あり 梅檀は二葉のころから芳香を放ち、梅の花はつぼみのころにはもうよい香がする。前項〔筆者注：梅檀は二葉（ふたば）より芳（かんば・こうば）し〕と同意。「梅檀は從_二葉_薰し、梅花は薔めるに香ありとは、かやうの事に知られ侍り」〔撰集抄-九〕」
- この成句の述語部分に、形容詞カウバシ・カンバシだけでなく、動詞クンズをも認める立場をとっている

のである。そして、後者の例として『撰集抄』を挙げていることが分かる。

2節で見たように、この成句の述語部分に使用されるのは必ずしも形容詞だけではなく、『撰集抄』の例をクンズと読む可能性もないとは言い切れない。しかし、クンズと読む可能性が出てくるのは「薰シ」「薰ジ」という表記の場合のみであり（「クンズ」の見える古辞書（『色葉字類抄』『文明本節用集』『書言字考』）では、「薰」の字のみを挙げる）、かつ、「薰」の字を使用した成句が『撰集抄』以外に見られなかったことを考えると、述語部分をクンズと認定できる他の例を見つけるのは困難である。

参考文献

- 麻原美子（1986）「軍記物語における成句—ことわざ・格言類一の位相（一）」『国文目白』25
- 飛田良文他編（2007）『日本語学研究事典』明治書院（志立正知執筆「保元物語」・西田直敏執筆「平家物語」・長谷川端執筆「太平記」・村上学執筆「曾我物語」）
- 宮地裕（1974）「成句の二三の用法について」『文学・語学（季刊）』74
- 池上尚（2010a）「嗅覚表現形容詞「カウバシ」の意味変化—“焦げるにおい”を表すようになるまで—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』18-1
- （2010b）「嗅覚表現形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」—近世以降における意味・用法の分担過程—」『国文学研究』162
- （2012）「嗅覚表現形容詞「クサシ」「～クサシ」—接尾辞「-クサシ」の発達を中心に—」『国語語彙史の研究』31

調査対象

既刊の総索引・テキストや早稲田大学中央図書館蔵本、「太陽コーパス」、「青空文庫」を利用した。なお、引用に際して表記を私に改めた部分がある。

掲出順は論文表中 No. に従い、複数の諸本を調査したものは2節で中心的に論じた底本に*を付す。

- ①半井本・鎌倉本・京師本・杉原本『保元物語』汲古書院 1972・1974／京団本『軍記物語集17』早稲田大学出版部 1990／宝徳本『保元物語』思文閣 1975／金刀比羅本*・古活字本『保元物語』岩波書店 1961／参考保元物語早稲田大学中央図書館蔵本 1693 ②屋代本『平家物語』新典社 1900／松平家本『平家物語』古典刊行会 1965／竹柏園本『平家物語』天理大学出版部 78／慶應大学斯道文庫蔵百二十句本『平家物語』汲古書院 1970／国立国会図書館蔵百二十句本『平家物語』古典文庫 1968／鎌倉本『平家物語』汲古書院 1972／龍谷大学蔵覚一本*『平家物語』岩波書店 1959／東京大学国語研究室蔵覚一本『平家物語』岩波書店 1991／平家正節『平家正節』大学堂書店 1974／波多野流節譜本『平家物語』勉誠社 1977／源平闘諍錄『源平闘諍錄』和泉書院 1980／四部合戦状本『平家物語』大安 1967／南都本『平家物語』古典研究会 1971／延慶本『延慶本平家物語』大東急記念文庫 1982／長門本『平家物語』国書刊行会 1906 ③松平本*・嵯峨本・鈴鹿本・書陵部本・静嘉堂本『撰集抄自立語索引』笠間書院 2001 ④内閣文庫蔵十一行古活字本*『源平盛衰記』勉誠社 1977／蓬左文庫蔵写本『源平盛衰記』汲古書院 1973 ⑤妙本寺本『曾我物語』角川書店 1969／大石寺本『大石寺本曾我物語（国史研究会 1914）』太山寺本『太山寺本曾我物語』和泉書院 1999／十行古活字本*『曾我物語』岩波書店 1966／彰考館本『曾我物語』三弥井書店 1968／万法寺本『曾我物語』古典文庫 1960 ⑥慶長八年十二行古活字本『太平記』岩波書店 1961／土井本*『土井本太平記』勉誠社 1997／梵舜本『太平記』古典文庫 1966／神田本『神田本太平記』汲古書院 1972／玄玖本『玄玖本太平記』勉誠社 1974／義輝本『義輝本太平記』勉誠社 1981／日置本『太平記』新典社 1990 ⑦『毛利家本舞の本』角川書店 1980 [8~10]『謡曲二百五十番集索引』赤尾照文堂 1978 [11]『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院 1986 [12]『天草版金句集本文及索引』白帝社 1969 [13]岡山大学池田家文庫蔵本『信長記』福武書店 1975／陽明文庫蔵本*『信長公記』国文学研究資料館マイクロフィルム／我自刊我叢書『信長公記』古書保存書屋 1881／町田家本・内閣文庫蔵本の校合『信長公記』人物往来社 1965 [14・17・20・25・28]『嘶本大系2・4・6・7・11』東京堂出版 1976・1979 [15]『毛吹草初印本』ゆまに書房 1978 [16]『近世町人思想』岩波書店 1975 [18]『仮名草子集成

2』三陽社 1981 [19]『新編西鶴全集 5』勉誠社 2007 [22]『近松全集 6』岩波書店 1987 [23・24]『八文字屋本金集 6』汲古書院 1994 [27]『風来山人集』岩波書店 1961 [29]『洒落本大系 5』林平書店 1932 [30]『譬喻尽並ニ古語名数』同朋社 1979 [31]早稲田大学中央図書館蔵本 [32・35]『馬琴中編読本集成 1・8』汲古書院 1995・1998 [33]早稲田大学中央図書館蔵文化三年刊本 [34]『椿説弓張月』岩波書店 1962 [37]早稲田大学中央図書館蔵文政十四年序刊本 [41]東京大学史料編纂所蔵本 [45]『浮雲』新潮社 1887 [46]『ことわざ』正文堂 1889 [52]『武藏野 1』1892 [56・66・67]『口演速記明治大正落語集成 4・6』講談社 1980 [56・64・77]『明治期国語辞書大系 普 12・雅 14・普 21』大空社 2003・2008 [62]『思出の記』民友社 1901 [63・85]太陽コーパス [70]『俚諺辞典』金港堂書籍 1906 [84]『新小説』1921.11 [88]『金言名句人生画訓』1929 [36・42・47・53・57~61・71・72・81・83・89・92]『ことわざ研究資料集成』大空社 1994 [26・38・40・43・73]『続ことわざ研究資料集成』大空社 1996 [39・44・48・49・74・79・82・86]『ことわざ資料叢書 1』クレス出版 2002 [50・54・68・75・76・78・87]『ことわざ資料叢書 2』クレス出版 2003 [21・51・65・69・80・90・91・93~96]『ことわざ資料叢書 3』クレス出版 2005

[付記]

No. 13『信長公記』の調査に際して国文学研究資料館に陽明文庫蔵本マイクロフィルムの閲覧を、
No. 41『仙台藩士谷津老鱗雑記』の調査に際して東京大学史料編纂所に資料の閲覧を、それぞれお許
しいただいた。ここに記してお礼申し上げる。